

養護学校におけるコミュニケーション支援のあり方に関する研究

- AAC（拡大・代替コミュニケーション）による支援

石川県立小松養護学校 米澤 早苗

（１）研修の概要

最近では養護学校に在籍する児童生徒の障害が重度化、重複化してきている。平成14年度の養護学校小、中学部の重複率は43.4%であり、知的障害養護学校中学部卒業者の高等部への進学率は、平成14年には94.4%になっている。筆者の勤務する知的障害養護学校高等部でも、この傾向がみられ、音声言語でコミュニケーションをとることが困難な児童生徒が増えてきている。このような児童生徒に対して、近年AAC（Augmentative and Alternative Communication 拡大・代替コミュニケーション）による実践報告がなされるようになってきている。AACとは、人工音声、写真、シンボル、サイン等の記号を用いたコミュニケーションで、重度の表出障害を持つ人々の形態障害や能力障害を補償するためのものである。

本研修では、AAC手段によるコミュニケーション支援の効果について検証するとともに、効果的な支援について考えた。

研修は以下の3点からなる。

先進的な実践を行なっている香川大学附属養護学校を訪問し、AAC実践がどのように行なわれているかを、見学やインタビュー、アンケートによって調査。

香川大学附属養護学校での、クラスの取り組みの調査結果をもとに、筆者が勤務校でAAC実践を試み、効果や問題点について考察。

石川県内の知的障害養護学校5校の教職員に対するアンケート調査。調査から得られたAAC実践の事例より、その効果や問題点について整理。

その結果、

香川大学附属養護学校での調査では、全校でのAAC実践の取り組みにより、音声言語のない児童生徒が、自発的にAAC手段を用いてコミュニケーションをとるなどのコミュニケーション能力の向上や、音声言語の出現が見られていた。同校での職員へのアンケートでも、児童生徒の変化の中に、情緒の安定、コミュニケーション意欲の向上、言語の受信・発信面の促進の記述がみられるなど、AAC手段の実践により、多くの成果が見られていた。

また、筆者の実践においても、必要なアセスメントをしながら実践を行ない、音声言語だけで指示するよりも、ことばの理解向上や理解できなかったことからの混乱がなくなり、音声言語の発信もみられた。

さらに、石川県内の養護学校職員に対するアンケートでも、AAC実践により、「日程をこなしたり課題を進める上での混乱が減った」、「児童生徒が自発的にコミュニケーションをとるようになった」を、多くの教師が認めている。

以上の調査、実践結果から、AAC手段の実践が、コミュニケーション能力の向上に効果があることが確認できた。

その一方で、筆者の実践では、生徒がカードなどのAAC手段を用いて、自発的にコミュニケーションをとるといった状態はみられなかった。また、アンケートのAACを実践する際の困難についての結果からは、コミュニケーションの不成功やコミュニケーション自体への不安が上位を占めるといった結果がみられた。さらに、AAC実践による変化は、「混乱が減った」等は多くの教師が認めているものの、「言語の理解」や、「音声言語の増加」は低い割合であった。よって、AAC実践は、児童生徒の状態に関わらず効果が現れる面と、児童生徒の状態により効果が現れにくい面があると考えた。また、その他の要因も影響していると考えられ、アンケート結果などから効果的なAAC導入について考えた。

1) AAC実践をされている児童生徒のうち、発信にカード類などを用いているのは、半数前後である。ことばの受信レベルが良いほど、写真カードなどのAAC手段を発信に用いている児童生徒は増え、ことばの受信レベルが低くなると減っており、「その他」の視線などの手段を発信に使っている割合が増えている。受信レベルが低くなると教師側の「伝わっているか不安」、「(児童生徒の)発信の不成功」が多くなっている。これらのことから、全ての児童生徒に写真カードなどのAAC手段が有効であるわけではなく、児童生徒の発信に写真カードなどのAAC手段を使いこなすには限界もあると考える。よって、児童生徒の実態をよく見極めながら行なうことが重要と考える。

児童生徒の実態を把握して実態に応じたAAC導入を行なうこと。

2) 観察+検査/ビデオ分析の場合、観察のみよりも「伝わらなかった」などの不成功が少なくなるという結果から、よく観察して必要に応じて検査等も行なうことで、児童生徒の実態を客観的に把握し、適切に導入できると考える。

観察に加えて、必要に応じて検査やビデオ分析等のアセスメントを行なうこと。

3) 児童生徒が「欲しい物を要求」、「今、何をしたいかの説明」、「遊びの選択」などの、要求を伝えるためにAAC手段を用いることが多いことから、要求を知ることで、AAC手段を発信に用いる糸口ができると考える。要求があまり

見られない場合は、日々の児童生徒との関わりの中で、楽しいことや好きなことを体験させ、要求を引き出すことも重要と考える。筆者の実践においても、生徒が友達や教師との関わりの中で、自分の持ち物を返して欲しいという気持ちを表現するために、自発的にジェスチャーを出していた。

発信の糸口として、児童生徒の要求を知ること

4) 保護者の実践や学校と保護者の協力、言語発達初期の小学部での取り組みが、自発的コミュニケーションの出現に効果があること。保護者の実践では、家庭へAACを持ち込むことで、より自然な要求場面が設定されやすいと考える。

小学部での導入や、保護者の取り組みや協力について検討すること

なお、実践をより効果的に行なうには、香川大学附属養護学校で行なわれていた「継続的な使用」や、できるだけ「広範囲での使用」が重要と考える。

また、AAC実践を行なうにあたり、準備やアセスメントには多くの時間が必要であり、十分な時間を確保できる環境作りが重要と考える。

(2) 研修成果の活用について

音声言語に困難がある児童生徒のコミュニケーション支援において、ことばの受信を助ける手段として、あるいはことばを発信する手段として、AACは有効であると考え。しかしその適用に当たっては、その児童生徒の適正も考慮して行う必要があると考える。カードなどを使いこなすにはある程度の理解力が必要であり、かつ、児童生徒が、AAC手段を用いる対象への興味もことばの発信には重要な要素である。日頃の観察や検査等のアセスメントを行ない、児童生徒の実態を客観的に把握して実践を行ないたいと思う。

AAC導入が適切と判断される児童生徒に、AAC実践を行なうことで、コミュニケーションに僅かでも変化がみられることを期待する。また、気持ちの発信手段としてAACを用いることができ、そのことで情緒の安定をもたらすことができればと考える。

しかしAAC実践を、児童生徒に合った形で効果的に行なうには、さらに研鑽が必要であり、今後も研修を続けていきたいと考える。